

事例

インストラクショナルデザインによる 学習者目線の教育改革

▶明治大学

明治大学は、学習環境の変化に合わせ、eラーニングへの取り組みを進めている。教育工学の概念である「インストラクショナルデザイン」を取り入れ、多様な学習者のニーズに応えた教材を作成するなど、オープンエデュケーションの時代にも対応し得る準備を進めている。

導入自体を目的にせず 教育の質向上をめざす

明治大学は司書課程、教職課程を中心にeラーニングを取り入れた科目を開講している。2013年度は31科目を延べ約1700人が受講した。

同大学がeラーニング導入の検討を始めたのは2005年。大学全入時代の訪れを控えた当時、いずれ通学課程、通信教育課程の区分が撤廃される可能性が大学関係者間で取りざたされていた。他大学に比べてeラーニングに関する対応が遅れていたことから、学内には導入を焦る空気があったという。

導入の推進役に就いた専任職員の宮原俊之氏は「形だけの導入では意味がない」と、対面授業と同等かそれ以上の教育効果を発揮する方法を、教育工学に求めた。そこで出会ったのが、授業設計の方法を理論立てた「インストラクショナルデザイン*」である。

対象とする履修者像を具体化し、求めるレベルをシラバスに明記する「入り口の明確化」、履修後に獲得すべき能力から逆算して授業内容を検討する「出口の明確化」、小テスト、提出課題、電子掲示板上のディスカッションなどによって学習成果を随時確認する「インタラクティブ性の確保」などを

設計するものだ。「システマチックな方法論なのでeラーニングとは特に相性がよく、海外には多数の実践例がある」と宮原氏は言う。この理論をベースに、2007年度からeラーニングを取り入れた科目が開講した。

効果的な授業設計を 組織的に支援

2009年度には、ICTを活用した次世代の大学教育を考える役目がある、ユビキタス教育推進事務室が設置された。以降、eラーニングを組織的に支援している。対面授業に比べて大きい教員の負担を軽減するとともに、学生が授業内容以外でつまずくことがないように、複数のスタッフを配置。教材の電子化を担うコンテンツスペシャリスト、学生からの相談を受けるラーニングコンシェルジュなどが、チームとして1つの授業をつくり上げる。

開講当初の主な目的は、離れたキャンパスの授業を履修できない学生に受講機会を提供するものだったが、現在は「より深く理解できる」と、キャンパスに関係なく積極的にeラーニングを選択する学生もいる。教員、学生の双方から「対面授業より大変だ」との声が上がる一方で、「労力に見合う成

果が得られる」との評価も定着してきた。単位修得率は対面授業とほぼ変わらず、成績優秀者はeラーニングを選択した学生が多いという傾向が出ている。

宮原氏は、「日本では、ICTは教育効果の向上に寄与していないと言われるがちだ。学生がより大きなメリットを感じられるように、ICTを使って教育環境を整えたい」と語る。

手法を対面授業に活用 FDとしての効果を生む

eラーニングを取り入れた科目は、並行して対面授業も開講されており、学生は履修登録時に一方を選択できる。

eラーニングの教材は、多様な学習者のニーズやレベルを汲み、受講中のあらゆる反応を想定して対策を盛り込むなど、学習者目線が徹底されている。この教材を対面授業にアレンジすることにより、以前よりも学生に対する配慮が行き届くようになった。一方的に話すだけだった教員が学生との議論を取り入れたり、到達目標に準じて試験の内容を変更したりする改善例もあるなど、インストラクショナルデザインに基づく授業設計のノウハウは、対面授業にも応用されている。

* 授業の質を高めるために、一つの科目の授業を設計する際、個々の学習項目を分析的・系統的にアプローチして設計しようという考え方。(明治大学 HP より)